

## 弥生時代中期後葉における矢羽根透孔の分布

山口莉歩

### はじめに

中・西部瀬戸内地域の弥生時代中期後葉の高杯脚部には、しばしば透孔が認められ、その形状には三角形、円形、矢羽根形などがある。特に矢羽根形(図1)は伊予地域で多く認められる傾向にあることが指摘されており、「矢羽根透孔=伊予」というイメージが広く共有されている。しかし、矢羽根透孔に関する具体的な研究事例は少なく、各地域におけるその出現頻度については検討の余地がある。本稿では、伊予地域・讃岐地域西部・備後地域南部の当時期遺跡を対象とし、矢羽根透孔の分布とその中心域について検討する。

### 1 先行研究と課題

矢羽根透孔に着目した研究は少なく、梅木謙一によって高杯の地域性を論じる上での一属性として取り上げられているのみである(梅木 2002)。梅木は弥生時代中期後半における四国4地域の高杯の脚部文様として透孔を抽出し、矢羽根形が中予、東予で多く認められると指摘している。しかし、梅木の論考の主題は別にあり、矢羽根透孔の詳細な分布状況については言及されていない。その一方で、矢羽根透孔はIV-2様式において顕在化するとされる(柴田 2000)。

したがって、本稿では、複数の遺跡から出土した資料を基に矢羽根透孔の分布域と中心域を明らかにする。

### 2 分析の方法

本稿で対象とする地域は、中・西部瀬戸内地域の伊予地域・讃岐地域西部・備後地域南部とする。時期は、矢羽根透孔が盛行する弥生時代中期後葉(柴田IV-2・3様式)とし、当該時期の高杯脚部を対象とする。矢羽根透孔は貫通しているものと、未貫通のものとが存在するが、本稿ではどちらも「矢羽根透孔」として扱う。分析の方法は、以下の通りである。各遺跡の報告書に掲載されている実測図より、高杯脚部を集成し、そのうち矢羽根透孔を持つものと、無文や三角形透孔などを含むその他、の2種に分類する<sup>1)</sup>。さらに各遺跡で高杯脚部総点数に占める矢羽根透孔の比率を算出し、その比率の比較を行う。

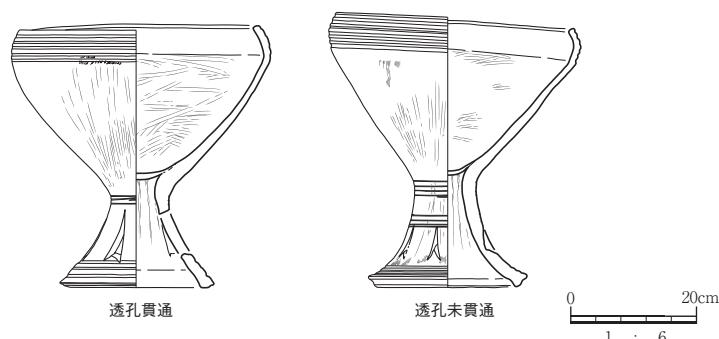


図1 高杯脚部における矢羽根透孔

### 3 分析

ここでは、高杯脚部に施される矢羽根透孔の比率について、地域ごとに検討する(表1)。

**伊予地域中部** 伊予地域中部の北条平野、松山平野では、弥生時代中期後葉の遺跡として小山田Ⅱ遺跡、西石井遺跡、文京遺跡、西野Ⅲ遺跡の4遺跡があげられる。小山田Ⅱ遺跡、西石井遺跡は出土した高杯の総数がそれぞれ2点、9点と少ないが、矢羽根透孔の割合は、小山田Ⅱ遺跡が50%、西石井遺跡が22.2%、文京遺跡が71.8%、西野Ⅲ遺跡が55.5%である。

**伊予地域東部** 伊予地域東部では、今治平野に位置する、阿方中屋遺跡、今若遺跡、経田遺跡、新谷森ノ前遺跡(SR09)、道前平野の明穂遺跡群、新居浜平野の松原遺跡、宇摩平野の医王寺Ⅲ遺跡、平坂Ⅱ遺跡があげられる。今治平野では、阿方中屋遺跡が92.9%、今若遺跡群が80%、経田遺跡が81%、新谷森ノ前遺跡SR09が89.7%と矢羽根透孔が8割以上を占める。道前平野、新居浜平野、宇摩平野では取りあげられる遺跡が限られるが、現状では、明穂遺跡群が90.9%、松原遺跡・医王寺Ⅲ遺跡・平坂Ⅱ遺跡が50%を示す。

**讃岐地域西部** 讃岐地域西部では紫雲出山遺跡を取り上げる。紫雲出山遺跡では、高杯脚部33点が報告され、そのうち5点が矢羽根透孔をもつ。矢羽根透孔の割合は15.2%である。

**備後地域南部** 備後地域南部では、茜ヶ峠遺跡、長波遺跡、御領遺跡の3遺跡があげられる。矢羽根透孔の割合は、茜ヶ峠遺跡が10%、長波遺跡が66.6%、御領遺跡では0%であった。長波遺跡が突出してみえるが、高杯脚部全体の出土数は3点と少數で、この結果は母数の少なさに影響を受けている可能性がある。

### 4 検討

#### (1) 分析結果についての検討

本項では、前章の分析結果について検討を行う。分析から今治平野と道前平野は、80%以上の高杯に矢羽根透孔を施文すると判明し、その他伊予地域東部の遺跡は、半数が矢羽根透孔という結果となった。次に矢羽根透孔の割合が大きいのは、71.8%の文京遺跡であるが、伊予地域中部の他2遺跡は60%以下に留まり、文京遺跡のみが高い割合を示す。文京遺跡の特徴については、改めて触れることとする。讃岐地域西部・備後地域南部では、各遺跡における矢羽根透孔の出土点数が0~5点と極少數で、平均して23%程度であることがわかる。

以上のことから、第一に矢羽根透孔は中・西部瀬戸内地域の広い地域で分布が認められることが判明した。第二に、今治平野・道前平野では8割、それ以外の伊予地域東部と伊予地域中部では5割、伊予地域外の讃岐地域西部・備後地域南部では2割程度と、その比率には地域によって差があることが判明した(図2)。

表1 高杯脚部の矢羽根透孔比率

地域	遺跡	矢羽根%	その他%	総数
伊予中部	小山田Ⅱ	50.0	50.0	2
伊予中部	西石井2次	22.2	77.8	9
伊予中部	西野Ⅲ	55.5	44.5	9
伊予中部	文京12・14・16次	71.8	28.2	85
伊予東部	阿方中屋	92.9	7.1	14
伊予東部	明穂	90.9	9.1	22
伊予東部	今若	80.0	20.0	25
伊予東部	医王寺Ⅲ	50.0	50.0	4
伊予東部	経田	81.0	19.0	63
伊予東部	新谷森ノ前2次	89.7	10.3	29
伊予東部	平坂Ⅱ	50.0	50.0	2
伊予東部	松原	50.0	50.0	4
備後南部	茜ヶ峠	10.0	90.0	10
備後南部	長波	66.6	33.4	3
備後南部	御領	0.0	100.0	4
讃岐西部	紫雲出山	15.2	84.8	33

まとめると、矢羽根透孔を採用する地域では、伊予地域の矢羽根透孔採用率が高く、なかでも今治平野・道前平野では8割を超えるのに対し、讃岐地域西部・備後地域南部では部分的な採用がなされた様相を示す。したがって、伊予地域のなかでも今治平野と道前平野が矢羽根透孔分布の中心であることが明らかになった。

柴田昌児は高杯脚部透孔の時期について、三角形と貫通する矢羽根形がIV-1様式で出現し、IV-2様式以降は未貫通の矢羽根形が盛行すると述べている(柴田 2005)。今回の分析対象からは外れるが、Ⅲ～IV-1 様式にあたる今治平野の阿方頭王遺跡群や、道前平野の久枝Ⅱ遺跡では、三角形や貫通する矢羽根形の透孔をもつ高杯脚部が多数出土しており、IV-2～3様式(弥生時代中期後葉)に先行して矢羽根透孔を使用している。したがって、今治平野と道前平野は、弥生時代中期後葉における矢羽根透孔分布の中心域というだけでなく、出現地域の可能性もある。

## (2) 矢羽根透孔普及の背景

本項では、前項で示した矢羽根透孔普及の背景について、文京遺跡を取り上げて考察する。前項で、伊予地域中部における矢羽根透孔比率が文京遺跡で突出している状況を示した。文京遺跡は、他地域から持ち込まれた外来系土器が出土する特徴的な遺跡である(田崎編 2014)。そのため、文京遺跡は流通の拠点集落として、他遺跡より多くの矢羽根透孔高杯を所有していた可能性が容易に想定される。さらに文京遺跡は、遺跡内での複数の製作集団による土器製作が行われたとされ(田崎 2021)、モノだけでなく人の往来の拠点でもあったと考えられる。柴田は、文京遺跡における非凹線文系土器を製作する伝統的な製作技術基盤に支えられた在地集団と、発達したヨコナデ技法を用いる新来の技術を会得し凹線文系土器を製作する集団の存在を示し、非凹線文系土器製作集団と凹線文系土器製作集団の関係性について断続的な接触・融和が行われていた可能性を示唆した(柴田 2006)。また柴田は、非凹線文系土器製作集団と凹線文系土器製作集団だけ

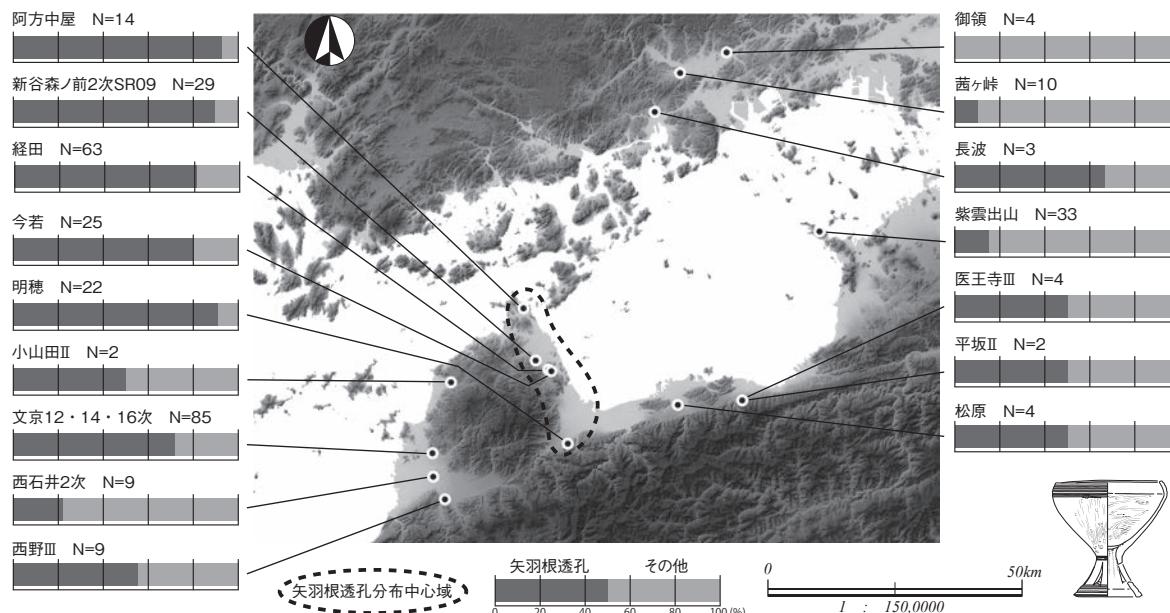


図2 中・西部瀬戸内地域における高杯矢羽根透孔の比率

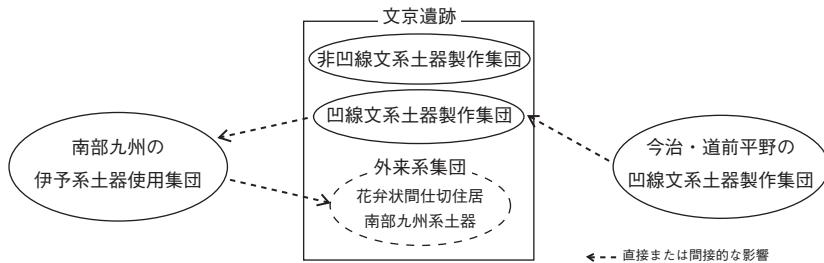


図3 今治・道前平野と文京遺跡、南部九州の関係模式図

でなく、外来系の土器の搬入品を使用もしくは製作する集団の存在も示している。河野裕次は、日向・大隅・薩摩地域などでも矢羽根透孔を持つ高杯を含む伊予系土器が出土しており、搬入によるものも多いとしている。また文京遺跡では土器の他に南部九州に特徴的な花弁状間仕切住居が検出されていることなどから、文京遺跡と南部九州で相互的で直接的なモノと人の移動があったとみている(河野 2011)。

このような文京遺跡を取り巻く状況からは、文京遺跡で矢羽根透孔高杯が多く出土する理由には、搬入もしくは模倣、あるいは製作者の移動などさまざまな要因が考えられる。ただ、柴田が示唆する凹線文系土器製作集団が、主に凹線文系土器を製作する地域のうち最も距離が近い今治平野・道前平野を出自とする集団であると仮定すれば、図3<sup>3</sup>のような構図が想定される。今治平野・道前平野で凹線文系土器を製作する集団が、文京遺跡の集団に対して、何らかの形で影響を与え、そのなかで矢羽根透孔が文京遺跡でも取り入れられたと推測される。さらに文京遺跡の凹線文系土器製作集団から、南部九州において矢羽根透孔を持つ高杯や、凹線文を持つ土器を含む伊予系土器を使用する集団へ土器の搬入が考えられる。一方で、文京遺跡においても南部九州系土器や花弁状間仕切住居から、南部九州からのモノや人の移動も想定される。この関係性を背景とすれば、文京遺跡を拠点とした今治平野・道前平野に由来する製作集団と南部九州との間接的な交流の可能性も考えられるだろう。ただし、花弁状間仕切住居を使用していた集団と、南部九州系土器を使用あるいは製作した集団、凹線文系土器製作集団がどのような関係性にあるかは今後、検討が必要である。

### おわりに

本稿では、弥生時代中期後葉の伊予地域中部・伊予地域東部・讃岐地域西部・備後地域南部を対象として、高杯脚部にみられる矢羽根透孔の分布について検討し、矢羽根透孔が中・西部瀬戸内海沿岸地域で広く分布している状況を確認した。その上で、矢羽根透孔の割合の大小には地域差があり、備後地域南部・讃岐地域西部では割合が小さく、伊予地域では大きいということを明らかにした。さらに伊予地域のなかでも、今治平野・道前平野が矢羽根透孔の分布の中心であることが判明した。また、今治平野・道前平野が矢羽根透孔の出現地域である可能性を示し、矢羽根透孔が広く分布した背景には、単純なモノのやりとりだけでなく模倣や製作者集団の移動など

複雑な様相が起因していると推測した。今後は土器がもつ複数の属性について検証を重ねつつ、実際に胎土の比較などの分析を行うことで、より実態に迫ることが可能になると考える。

#### 註

\*1 今回の分析で用いた高杯脚部は、新谷森ノ前遺跡を除き、全て報告書掲載図によるもので、実見は行っていない。矢羽根透孔の有無の判別は、報告書に明記があるもの、もしくは図上で形状が明確に判断できるものとし、判然としないものは総数に含めていない。ただし、無文と判断したものに関しては、小片のため復元図に反映されていない可能性もある。また、未報告資料は含まない。

\*2 新谷森ノ前遺跡2次SR09は現在整理作業中である。概要は以下の論文に示されている。

多田仁・沖野実 2014 「愛媛県今治市新谷森ノ前遺跡の2次調査速報—平成24年度調査における弥生時代後期の一様相一」 『紀要愛媛』10 (公財)愛媛県埋蔵文化財センター

\*3 図3は柴田2009掲載の図9・10を参考に作成した。

#### 参考文献

- 梅木謙一 2002 「四国弥生時代中期後半の高坏にみる地域性」 『徳島の考古学』 徳島考古学論集刊行会
- 河野裕次 2011 「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究」 『地域政策科学研究』 第8号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科(博士後期課程)地域政策科学専攻
- 柴田昌児 2000 「伊予東部地域」 『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社
- 柴田昌児 2005 「中期弥生土器総論」 『一般国道196号今治小松道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第3集 久枝遺跡 久枝Ⅱ遺跡 本郷Ⅰ遺跡』 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌児 2009 「松山平野における弥生社会の展開」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 149 国立歴史民俗博物館
- 田崎博之 2021 「文京遺跡における土器製作工人と土器生産」 『土器生産技術は、いかに共有化され、維持・伝達されていたのか－平成30年度～令和2年度化学研究費補助金基盤研究(B)(一般)研究成果報告書－』 愛媛大学

#### 発掘調査報告書

##### 広島県

広島県埋蔵文化財調査センター編 1981 『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書3 神辺御領遺跡』 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター編 1984 『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書26 松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター編 1985 『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書39 石鎚権現遺跡群・茜ヶ崎遺跡発掘調査報告』 広島県埋蔵文化財調査センター

##### 香川県

三豊市教育委員会編 2016 『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書 9：紫雲出山遺跡』 三豊市教育委員会

香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会編 1964 『紫雲出』 香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会

##### 愛媛県

今治市教育委員会編 2001 『今治市埋蔵文化財調査報告書62：阿方中屋遺跡3』 今治市教育委員会

愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1990 『埋蔵文化財発掘調査報告書35：小山田2遺跡・小山田支群』 愛媛県埋蔵文化財調査センター

愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1991 『埋蔵文化財発掘調査報告書38：四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3』 愛媛県埋蔵文化財調査センター

愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1995 『埋蔵文化財発掘調査報告書54：明穂東岡遺跡・明穂I 東岡東遺跡・明穂東岡II 遺跡・明穂中ノ岡III 遺跡』 愛媛県埋蔵文化財調査センター

愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2005 『埋蔵文化財発掘調査報告書122：久枝遺跡・久枝2遺跡・本郷1遺跡』 愛媛県埋蔵文化財調査センター

愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2006 『埋蔵文化財発掘調査報告書127：松原遺跡』 愛媛県埋蔵文化財調査センター

愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2007 『埋蔵文化財発掘調査報告書138：阿方頭王VII 遺跡・阿方頭王VIII 遺跡・阿方頭王IX 遺跡・阿方頭王X 遺跡・阿方頭王XI 遺跡・阿方頭王XII 遺跡』 愛媛県埋蔵文化財調査センター

(公財)愛媛県埋蔵文化財センター編 2013 『埋蔵文化財発掘調査報告書 176：今若遺跡2次』 愛媛県埋蔵文化財センター

(公財)愛媛県埋蔵文化財センター編 2014 『埋蔵文化財発掘調査報告書 180：経田遺跡』 愛媛県埋蔵文化財センター

田崎博之編 2014 『文京遺跡VII-1 文京遺跡第16次調査A区 愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXVI-3』 愛媛大学埋蔵文化財調査室

田崎博之編 2019 『文京遺跡VII-3 文京遺跡第12次調査 愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXVI-1』 愛媛大学埋蔵文化財調査室

田崎博之ほか編 2020 『文京遺跡VII-2 文京遺跡第14次調査 愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXVI-2』 愛媛大学埋蔵文化財調査室

松山市教育委員会/松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 2006 『松山市文化財調査報告書112：東石井遺跡/西石井遺跡1・2・3次調査地』 松山市教育委員会/松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

#### 図表出典

図1～3、表1は筆者作成。図1・2の実測図は現在整理作業中の新谷森ノ前遺跡出土の高杯。図2は国土地理院基盤地図情報数値標高モデル10mメッシュより筆者が加工して作成した。

(2023年3月31日)